

# スポーツ文化： 身体運動と文化に関する基礎的研究

メンバー：佐竹 弘靖（ネットワーク情報学部教授）、飯田 義明（経済学部教授）

## 2023年度のスポーツ文化部門における活動概要

### はじめに

近年ではコロナ禍などの影響もあり、聞き取りやフィールドワーク等を用いた調査はなかなか行うことは出来なかった。その一方で、テクノロジーの発展によりZoom等を利用した聞き取り調査等も行われるなど、調査方法もテクノロジーの影響を受けるようになってきた。そのような状況のなかで、スポーツ文化部門では「身体運動と文化に関する基礎的研究」をテーマに於き、歴史的な資料、著作物からのアプローチや調査対象からの聞き取りやフィールドワーク等の研究手法を用いて研究を進めてきている。

佐竹は戦前の日本スポーツ界で活躍した前畑秀子（水泳）、大学生達（ラグビー）、金栗四三（陸上）、正力松太郎（野球）に着目して研究を進めている。それらの選手を通して

見える近代化との関係を再考する試みをしている。また、飯田は東北大震災後の小さな集落の祭りに着目し、その現状を地域社会の歴史的な変化からその意味を考察している。これらのスポーツ文化部門における共通点は、日本が近代化を遂げる過程において、スポーツや祭りが社会にどのように影響を与えてきたのかを身体との関係という視点から捉え返そうとしている点である。

上記の視点からこれまでの研究活動を紀要・所報等に発表。詳細については、以下に活動概要として記した。

### 本年度の研究活動概要

#### 佐竹弘靖

- 1) 狛江市との連携事業の一環として、スポーツ推進講演会「近代スポーツの先駆者達」を4回開催
- 2) 研究の一部を「日本女子水泳界の先駆

者—前畑秀子の生涯—」として専修大学スポーツ研究所紀要第47号にて掲載  
3) その他

#### 飯田義明

- 1) 「諏訪における御柱祭」研究の継続としてフィールドワークを2回行う
- 2) 宮城県石巻市牡鹿半島へのフィールドワークを2回行う。その一部を「宮城県石巻市牡鹿半島にある小さな集落の夏の例大祭：大原浜の状況」として、専修大学スポーツ研究所所報に報告

## 研究活動および学内外活動

### 1. 研究活動

昭和史を背景として基礎を築いてきた現代スポーツの栄枯盛衰をスポーツ史・スポーツ人類学の視点から研究を続けており、令和5年7月4日のスポーツ研究所第2回研究会で「昭和史に見る現代スポーツの生成過程と変遷—スポーツジャーナリストの夜明け—」と題して発表した。「学生野球の父」と称される飛田穂洲氏の足跡を辿り、現代の学生野球の成立・発展の系譜ならびに、飛田氏が深く関わったメディア（特に新聞）が、我が国にスポーツを普及させた影響等をまとめたものがその内容となっている。今後も、あらゆる現代スポーツについて研究を継続していく。

### 2. 学外活動

1999年にスポーツ科学と柔道整復学の学際領域をカバーする学術団体として設立された学術団体である「日本スポーツ整復療法学会（Jsspot: The Japanese Society of Sport Sciences and Osteopathic Therapy）の学会長として、関東支部研修会（2回実施）ならびに第25回学会大会の運営等を統括した。学会では一般発表の外に「スポーツ栄養学はじめての一步」、「エコーを用いた整骨院でよく遭遇する手関節疾患の評価」などのシンポジウムを行った。なお、本学会で開催された理事会において、次期学会長に指名され会長職を継続することとなった。

### 3. 学外活動

狛江市教育委員会主催の2023年度狛江市スポーツ推進講演会で「近代スポーツの先駆者」と題して令和5年6月、8月に講演を行った。同じく狛江市教育委員会主催で実施された「大人の知的好奇心ウォーキング」では、「稲毛重成と枳形城」の講演を行った。なお、令和5年度より狛江市スポーツ推進審議会委員に委嘱された。その他、月刊総合誌「公評」で「続・源流探訪—新たな活動の文化史—」と題した執筆を継続中である。

佐竹 弘靖（ネットワーク情報学部教授）





スポーツ文化：身体運動と文化に関する基礎的研究

宮城県石巻市牡鹿半島にある小さな集落における夏の例大祭：大原浜の状況

2-1 はじめに

東日本大震災の後、牡鹿半島では無形民俗文化財としてこれまで余り着目されていない地域の獅子振りや様々な祭りなどが着目され、それらの再開が震災からの復興のシンボルとして捉えられてきた。その一方、震災から12年が過ぎた小さな集落では現在どのようになっているのか、その状況を報告するのが本稿の目的である。

2-2 牡鹿半島大原浜の概要

牡鹿半島は東北三陸海岸の南端に突き出した小さな半島であり、2011年3月に起きた東日本大震災では、震源地にも近く半島も直接的な大津波を受け甚大な被害を受けている。半島の仙台湾側に面した側は表浜、逆側の女川湾側が裏浜と呼ばれている。この地域の多くの集落では漁業と狭い耕地での農業で生計を立てているが、大原浜は港湾を築く

ことができ、人や物資の中継地として小規模な町場を形成している（加藤，2021，pp.32-33）。このエリアの中でも大きな集落の一つである大原浜は表浜に位置し、水産加工業もあるが漁業を生業としている人が少なく、「こころは、昔からサラリーマンで働きに行く者が多い」というように別の地域に働きに出て行く傾向が強い。震災時は多くの家や水産加工工場が流されたこともあり、現在では浜の人口は半分以下になった（山口，2014，pp.90-99）。震災前に200名ほどいた住民は、震災後は地区外へ避難し80名ほどに減少し、23年「現在では更に地区から住民が減少」している。

2-3 2023年三熊野神社における夏祭り(例大祭)

震災直後の2011年の例大祭は「復興祈願祭」として行われた。ただし神輿は震災によって破損しており、この年は担がれていない。2012年には、仙台市の老舗ホテル「江陽グランドホテル」が所有する3つの神輿<sup>1)</sup>のうちの1つがホテルから大原浜に寄贈(2012.7)され、

その神輿で大々的に開催された。ただし、現在の住民だけでは神輿を担ぐことができないため、例大祭のために戻ってきてくれた他の地区に転出した人々や募集したボランティアで参加してくれた人々で開催される運びとなった<sup>2)</sup>。ちなみに、2019年から2022年まではコロナ禍のため開催はされなかった。そのため、2023年は久しぶりの開催となった。

2023年(令和5年)、大原浜の夏祭りは7月の15日(土)、16日(日)の2日間で開催された。15日の10:00頃から提灯付けや社殿内のお供え物などの様々な準備がゆっくりと始まった(写真1)。同時に焼き鳥、焼きそばなどの屋台や生ビールのサーバーや飲み物などの準備も進められていった(これらの屋台は集落の氏子が準備し無料)。17:00頃から徐々に人々が集まり、神事が始まったのは18:00頃であった。神事の際は境内に前・現行行政区長他関係者(ボランティアの方々も含む)が入り、それら以外の方は周囲を取り囲むようにして参加した。神事では、獅子振りも披露された(写真2)。その後は、境内で飲食をしながら各々で語り合う時間となった。また、長年参加してきたボランティアの方々や東北大学の留学生グループな



写真1 三熊野神社参道



写真3 境内での獅子振り



写真3 神輿を神社へ

ども境内に入り、太鼓などを経験させてもらっていた。

16日は、朝から公民館の役割をしている建物前（ボランティアの方々や宿泊などをする）で神輿の準備が始まる。男性は、神輿を運び出し組み立てを行い、女性は軽食などの準備に勤しんでいた。ボランティアの方々や神輿を担げる体力を有する集落の方々は、白装束に着替えて草鞋を履いて準備をした。東北大学の留学生は集落の方に着方や履き方を習いながら何とか着替えていた。準備終了後に神輿を隣にある三熊野神社に運び上げ、宮司にお清めをしてもらい集落を練り歩き始めた（写真3）。神輿を運ぶ際は、「じょうさい、じょうさい」<sup>3)</sup>と独特の掛け声をかけながら行われた。途中の水産加工センターの駐車場で何度か練り歩いたあと、そこで休憩を挟みスイカ割りのイベントが行われた。それは、担ぎ手の多くが留学生や加工センターの外国人技能実習生であったこともあり、参加者が盛大に行われた。その後、集落の一番奥まで行き、終着点の浜まで掛け声をかけながら一気に運ばれた。浜では宮司によって神輿のお清めが行われ、獅子振りを舞った後に全員で撮影をした（写真4）。

終了後にスタート地点に神輿を運び解体し片付けて全ての日程が終了した。時刻は14:00を過ぎた頃であった。

## 2-4 夏祭りに参加して

現在の行政区長は「今回無事に祭りができたが、いつまで続けることができるのか」と言う。今回の神輿の担ぎ手は、ほぼボランティアであった。復興当初は、他地区へ移っていった家族などが祭りに参加するために集落に戻ってきていたようだが、今回は戻って参加した家族は少なく「コロナの影響は大きい」と残念がっていた。同時に、獅子振りについても継承していく若者が集落にいないこともあり、「自分達と共に消滅していくしかない」<sup>4)</sup>と寂びしそうに語るのを聞き、外部参加する私にとって、祭りの継承や復興のシンボルを軽々に是として捉える構えを再考させられることとなった。

### 注記

1) 寄贈された神輿は、約1.2メートル四方、高さ約1.8メートル、重さ約200キロで、東京・浅草のみこし製造会社が製作し、大原浜地区の従来のみこしの3倍である。

2) 今年も元気な声が浜に響きました！大原浜三熊野

神社祭り(youtube.com)

3) 「じょうさい」とは、神社などにお金などを寄付する「浄財」に由来するとされている。

4) 獅子振りは、各集落によって音の取り方や動き方が少しずつ異なっており、そのことにアイデンティティを持っているため、出身集落と異なると違和感があるそうである。現在、小学校が統合され、学校が民俗継承として子どもに獅子振りを指導しているが全てが同一であり、それに違和感を感じている人々もいるようである。

### 参考文献

加藤幸治[2021]「第一章 遙かなる鮎川」『津波とクジラとペンギン』、社会評論社、pp.32-33.

山口未花子[2014]「牡鹿半島の集落における祭り復興の三つの型」『無形民俗文化財が被災するということ』高倉浩樹・滝澤克彦(編)、新泉社、pp.90-99.

飯田 義明（経済学部教授）

付記：これらの本研究の一部は令和5年度スポーツ研究所助成（調査研究費：スポーツ文化部門）を受けたものである。



写真4 参加者全員で